

藤田豊八の中国文学史研究

杜 軼 文

はじめに

明治期に入ると、西欧のさまざまな思想や文物が輸入されたが、近代的文学概念もまた新たに導入された。それまで一口に漢学と呼ばれていた学問は哲学・文学・歴史などの部門に分かれ、いくつかの独立した研究対象になり、それらに対する研究は、系統化し科学的に行われ始めることになった。その早期の研究者たちには東京大学出身者が少なくなかった。彼らの業績について、江上波夫が編著した『東洋学の系譜』は、次のように評価している。⁽¹⁾

彼らは東亜の新しい黎明に文科大学の同期生として互に親睦し、期せずして既成の日本の視野の狭い枠を越え、日本・中国・満蒙・朝鮮などを一体として東洋として観る認識に向い、さらに西洋の文化・学術も視野に入れた、開かれた世界志向の東洋史観・日本史観に立つに到ったと見られる。

そのことは彼らが中国の文化・文学も、日本の文化・文学も新しい東洋史観・日本史観の立場から見直そうと競い

立った観があることから容易に窺われるのである。そうしてそのような運動の中心人物の一人として藤田豊八があったことは彼のその後の日中両国に於ける一貫した生き方、在り方からみて疑問の余地がないと言つてよい。

即ち、彼らの研究活動は旧来の観念を越えて、東アジアの一体性を認識したうえに、新たな日本を再発見し得たのである。また、彼らの研究によって、いわゆる東洋学も確立した。したがって、彼らの研究活動に対する研究は、日本の学問系統がいかに近代化してきたかという問題を検討するときには、極めて大きな意義があると考えられる。本稿は、この研究活動の核心的人物であった藤田豊八を取り上げたいと思う。藤田豊八は近代日中文化交流史において大きな貢献をしたが、彼に対する従来の評価は必ずしも充分ではない。日本では、彼は東洋史学者として名高く、彼の東洋史研究を検討したものが殆どである。中国では、彼を「日本教習」として、また翻訳者として、その役割を研究するに止まっている。そして、彼の中国文化・文学研究の一環である中国文学史研究に対する評価は極めて低かった。このため、本稿では彼の明治期における中国文学史研究の活動を追究し、その研究価値を位置付けようと思う。

一

藤田豊八（一八六九—一九二九、号は劍峰）については、小柳司氣太の「藤田豊八博士略傳」、江上波夫編著『東洋学の系譜』（第2集）⁽³⁾、そして、川合康三編『中国の文学史観』⁽⁴⁾に紹介が見られる。それらによれば、彼の人物像は次のようになる。

第一に、彼は文章家である。特に青年期、即ち東京帝国大学に在学していた時から渡清までの数年間、彼はたくさんの雑誌に盛んに投稿していた。しかも、内容は中国文学・思想・歴史・人物などの多分野にわたっていて、それぞれの分野に新たな評価を下していた。同時に、彼は日本の対清政策や日中両国の比較などに積極的に発言し、新鮮な解説で世人の

注目を浴びていた。⁽⁵⁾

第二に、彼は教育者である。その生涯の大半を大学で教師として過した。彼の教育に対する関心は、早く明治二十九年の「東亜学院」の創立によって、明らかである。そして、最初に書いた教科書が『中等教育東洋小史』（明治三十年）、『中等教育東洋史』（明治三十二年）である。それらは、文部省が明治二十七年に東洋史を中等教育の科目に組み入れてから、まもなく編纂されたものであった。ほぼ同時期に、彼は当時の東京専門学校（後の早稲田大学）や哲学館（後の東洋大学）で「支那文学史」、「支那史」及び「支那倫理史」などの講義を行っている。それらはいずれも当時ではまったく注目されていなかった新たな分野であった。また、大正に至って、彼は東京帝国大学、早稲田大学、臺北帝国大学で東洋史を中心とする講義を行った。彼の影響で、前嶋信次、松田寿男らが、南洋史、西域史の専門家になった。⁽⁶⁾

実は、彼は中国の近代教育史においても注目に値する人物である。一八九七年から一九一一年の十数年間、彼は上海、湖南、江蘇（蘇州）、廣東へ行き、各地で教育事業に献身的な努力を傾けた。例えば、彼の江蘇教育への貢献を詳しく論じているのは、蔭山雅博の「江蘇教育改革と藤田豊八」⁽⁷⁾である。特に、東文学社の教習として中国人の学生に日本語の講義を行ない、それを通じて生まれた彼と羅振玉、王国維との二十年にわたる学術交流と友情は日中文化交流史における一つの美談となった。

第三に、彼は中国近代農業科学技術の導入などにも大きな貢献をした。日清戦争で日本に敗れた後、中国の国内では「变法自強」の機運が一段と高まった。この背景の下で、羅振玉が農学会を発足させ、一八九七年には中国最初の科学専門誌とされる『農学報』を創刊した。維新の名士梁啓超は創刊号の「序」において「近くは日本を師として以ってその変革の所以を考察し、遠くは欧米を仰ぎて以ってその立法の由緒を得るべし」と唱えた。『農学報』の文章はほとんどが外国の農業技術を紹介する訳文であるが、日本語からの翻訳が全体の八割以上を占めていた。即ち、『農学報』は最も早く日本近代

農業科学技術を撰取した雑誌であり、藤田は『農学報』の日本語翻訳者として一八九七年に清国上海に行った。李素楨によれば、藤田が翻訳したものは、

内容から見ると、作物栽培、害虫予防、土壤肥料、農機具、農産品加工、牧畜飼養及び病気予防、養蚕業、漁業、林業、園芸、灌漑、国外の農事消息に及んで、殆ど農業生産の全内容を含めている。

と多岐にわたっている。⁽⁸⁾ 即ち、藤田は近代中国の農学技術の発展にも大きな役割を担ったのである。

本稿は、上述のように、彼の中国文学史研究者としての面を追究することを目的とする。まず、彼の中国文学史研究に關わる経歴を整理してみよう。いま彼の著作目録⁽⁹⁾から見ると、明治三十五年以後には中国文学史に関する著述が見られない。このため、前掲の三つの紹介資料に基いて、彼の明治三十五年までの足跡を整理する。

明治二年（一八六九）年九月十五日 徳島県美馬郡^{こほぎと}里村の旧家に生まれる。

明治十九年（一八八六） 徳嶋中学校を卒業。

明治二十年（一八八七） 大阪に赴き、第三中学校の豫科に入学。

明治二十三年（一八九〇） 本科に進む。

明治二十五年（一八九二） 本科を卒業、直ちに東京帝国大学文科大学漢文科に入学。

明治二十七年（一八九四） 小柳司氣太・田岡嶺雲らと『東亜説林』を発行。

明治二十八年（一八九五） 漢文科を卒業、さらに大学院に進み、「支那哲学史」を専攻。

明治二十九年（一八九六） 小柳司氣太・田岡嶺雲らと東亜学院を創立、通信教育を興す。

田岡嶺雲・笹川種郎・白河次郎と共に『江湖文学』を創刊。

『中等教育東洋史』を出版。

明治三十年（一八九七）

『支那文学史稿先秦文学全』を出版。

清国上海に赴き、羅振玉が主宰した「農学報」の翻訳者として勤務。

明治三十一年（一八九八）

羅振玉が東文学社を開設、教授・教務を引き受けて、「教習」に任じられる。

明治三十三年（一九〇〇）

義和団事件によって帰国。

明治三十四年（一九〇一）

羅振玉等と共に、盛宣懐の依頼をうけて南洋公学附属の東文学堂を創建、教授に就任。

明治三十五年（一九〇二）

教育顧問として廣東に赴任。

年末帰国。

即ち、彼は東京帝国大学漢文科に入学した直後から、そのすぐれた文筆の才によって、学界の中心的な存在となり、雑誌『東亜説林』・『江湖文学』を創刊すると共に、幅広く『精美』・『東洋哲学』・『哲学雑誌』・『六合雑誌』・『帝国文学』・『太陽』・『日本人』・『宗教』の諸雑誌へ投稿していた。それらの論文は、ほぼ半分は中国文学に関するものであった（「おわりに」参照）。

そして、さらにつけ加えなければならぬのは、明治二十八年から三十年の始め頃まで、彼は学校経営や著述のほかに、前述のように東京専門学校・哲学館で講義を行ったことである。そのうち、東京専門学校で行った「支那文学史」の講義が、藤田の中国文学史研究の成果とされる。

東京専門学校で「支那文学史」の講義を開設したのは藤田である。従って、その講義録の完成時期や刊行時期の考察は中国文学史研究の上で大きな意義があるが、いまだに不明な点が少なくない。ここで、新たな資料を利用して、その完成及び刊行時期を推測しよう。

現在、国会図書館には、藤田豊八が講述した『支那文学史完』と題する東京専門学校講義録は二冊あり、マイクロフィルムで保存されている。また、錢鷗によれば、九州大学文学部高瀬文庫にも一本蔵されており、竹村則行も一本を蔵している。二冊の講義録は、「東京専門学校邦語文学科第一回二年級講義録」版（以下「第一回二年級講義録」と省略する）と「東京専門学校文学科第二回三年級講義録」版（以下「第二回三年級講義録」と省略する）である。

「第一回二年級講義録」と「第二回三年級講義録」との間には違いが見られる。というのは、前者は後者より頁数が多いことである。これについて、錢鷗の調べによれば、

竹村則行氏所藏の同書（「第一回二年級講義録」 筆者注）では、「序論の前に「支那文学史例言」（3頁）、「年号表」（15頁）、「支那文学史総論 島村瀧太郎」（6頁）、「稟告明治二八年六月東京専門学校」（2頁）、あわせて14葉が置かれている。落丁であろう。

と述べている。¹⁰ 即ち、序論の前の十四頁は本文と関係ないものである。「第一回二年級講義録」は「第二回三年級講義録」とまったく同じものだと推測されたのである。ただし、国会図書館所蔵の「第一回二年級講義録」は、「稟告明治二八年六月東京専門学校」（2頁）は欠いて、即ち序論の前に「支那文学史例言」（三頁）、「年号表」（十五頁）、「支那文学史総論 島村瀧太郎」（六頁）、合せて十二頁だけが置かれている。

そして、二冊の完成時期と刊行時期については、錢鷗は次のように述べている。⁽¹¹⁾

現在の国会図書館の目録には、「東京専門学校邦語文学科第一回二年級講義録」と書かれ、明治28年～30年とされている。これは東京専門学校と同講義録は明治28年から刊行が始まったから、「第一回」といえば28年となることから推定したものであろう。そしてこの講義録は『支那文学史』と題しながらも実際には「東漢文学」のところで終わり、終頁に「講者支那行の事あり、遺憾ながらここにこの稿を中止す」という附言がある。藤田豊八は明治30年の春に中国に行ったことによって、明治30年の完成とも考えられているだろうママ。『支那文学史』の完成は28年から30年までのいつであったか、確定はできないにしても、その中の多くの章節が、30年以前に雑誌上に発表されたことは確かである。

即ち、錢鷗は「第一回二年級講義録」の完成は明治二十八年から三十年までの或る時点であったと考えているが、その刊行時期については触れていない。

また、それについては和田英信が別の考え方を示している。⁽¹²⁾

最初期の「文学史」のひとつである藤田豊八の『支那文学史』は、この文学科講義録として刊行されたものと思われる。これも『早稲田大学百年史』によれば、藤田の東京専門学校への出講は「明治二十八年九月～三十年？」とされており、その題目は「支那文学史」ならびに「支那史」(I、一〇三八頁)。藤田の帝大卒業が二十八年、文学科講義録の刊行が同年よりのことであり、また藤田の書に「東京専門学校邦語文学科第一回二年級講義録」とあること。また三十年に藤田は渡清したこと、さらに同書末尾に「講者支那行の事あり、遺憾ながらここにこの稿を中止す」とあることなどを考え合わせるならば、同書の稿はほぼ明治二十八年にはすでに成り、実際の刊行は三十年のことであると推定される。

つまり、和田英信は、「第一回二年級講義録」の完成は明治二十八年ごろで、刊行は明治三十年であると推測している。ところが、上述の推測はすべて「第一回二年級講義録」について行われているのであって、「第二回三年級講義録」にはまったく触れていない。

ここでは、新たな資料を補充しながら、「第一回二年級講義録」と「第二回三年級講義録」の完成及び刊行時期を考察しようと思う。

まず、『早稲田大学百年史第一巻』では、東京専門学校講義録について、次のように述べている。⁽¹³⁾

東京専門学校講義録

正科課目

正科課目ハ本校各講師ガ本学年校内ニ於テ授業スル所ノ講義及各専攻ノ博士・学士自身執筆ノ任ニ当ル所ニシテ、学理ノ蘊奥ヲ闡キ、兼テ實際上ノ知見ヲ養成セシム。殊ニ其文章ハ明晰通暢毫モ難解の虞ナキヲ期ス

即ち、講義録は二つのルートによって作られることがわかる。一つは、実際に教室で行った講義に基いて作られたものである。一つは、教室という教育現場から離れて、専門家として書かれたものである。

また、当時の講義録は、「或いは家庭の事情により、或いは健康の障害により、或いは経済上の理由によって、正科を受講できない多数の同胞に、学苑の教育に触れることを可能にした⁽¹⁴⁾」という役割があつて、講読者はすべて校外生であつた。そして、明治二十八年一月の『中央時論』では、東京専門学校「校外邦語文学講義」の広告が掲載されている。つまり、東京専門学校文学科の講義録は明治二十八年に刊行が始まつた。

この文学科講義録の編纂内容及び執筆者については次のように記載されている。⁽¹⁵⁾

学科としては、一年級に、哲学、論理学、美辞学、史学、日本文学史、英文学史、和漢英文評釈、二年級に、哲学史、

心理学、美学史、日本文学史、支那文学史、英文学史、和漢英文評釈、三年級に、哲学史、倫理学、社会学、支那文学史、独文学史、仏文学史、英文評釈、言語学、戯曲史が挙げられ、講師としては、今井鉄太郎、池ヶ谷一孝、畠山健、大西祝、金子馬治、立花銚三郎、坪内雄藏、上田万年、藤田藤之助、藤代禎輔、小屋保治、後藤寅之助、齋藤木、齋藤阿具、阪田典治、島村滝太郎、関根正直が名を列れている。

即ち、この最初の文学科講義録では、藤田が書いた『支那文学史』は含まれていないのである。ここで、ひとつ注意しておきたいのは、島村滝太郎と支那文学史との関係である。

島村滝太郎（一八七一—一九一八、号は抱月）は、東京専門学校の明治二十七年文学科卒業生であり、坪内逍遙の第二期弟子でもある。『早稲田文学』早期の編集者の一人である。『早稲田大学文学部百年史』では、次のように彼のことを述べている。⁽¹⁶⁾

第七十二号（『早稲田文学』Ⅱ筆者注）（明27・9・25）には卒業と同時に編集部入りした島村抱月の「審美的意識の性質を論ず」が、文学科開設以来最優秀の卒業論文ということで掲載された。以後、抱月は「悲劇の種類を論ず」、「厭世観の種類及び其の要件」などの斬新な評論を矢継ぎ早に発表し、早稲田随一の俊秀の名をほしいままにした。

そして、上述の竹村則行所藏の「第一回二年級講義録」には、島村滝太郎の名で「支那文学史総論」の一文があることから、恐らく最初の東京専門学校文学科講義録には島村滝太郎の『支那文学史』があったと推定できる。のち彼が東京専門学校で支那文学史の講義を行ったのである。⁽¹⁷⁾（島村瀧太郎と「支那文学史講義録」については、別の論文で詳しく論じる）。即ち、彼の明治二十八年の講義録は教室という教育現場から離れて、専門家の立場から書かれたものであろう。その刊行は明治二十八年一月ごろではなかったと考えられる。

これに対して、教室で行われた講義の内容に基いて書かれた支那文学史の講義録は藤田のものである。確かに、藤田は

明治二十八年九月から三十年のある時期まで東京専門学校の文学部講師であったが、『東京専門学校校則・学科配当資料』の資料43によれば⁽¹⁸⁾、藤田は明治二十九年～三十年度に「支那文学史」と「支那史」との講義を行ったことがわかる。また、明治二十八年から、藤田は中国文学に関する論文を発表し始めた。一つの講義録として書くのは、やはり講義が行われてからのことであろう。即ち、藤田の支那文学史講義録は早くも明治二十九年九月から書き始めたことがわかった（当時、東京専門学校の一学年は九月から翌年の八月までの一年間ということである）。そして、この完成時期について、「藤田豊八博士略傳」では、小柳司氣太が、

明治三十年（廿九歳）藤田豊八）此の年春清國に渡り、馬建忠と共に新聞を経営す。

（東亞學界雜誌、本年五月號）。

と述べている。⁽¹⁹⁾つまり、講義録は明治三十年の春ごろ完成されたと考えられる。

藤田の「邦語文学科第一回二年級講義録」と「文学科第二回三年級講義録」について錢鷗と和田英信はまったく同じシリーズのものとして扱っているが、実際は、それらは二つの別々のシリーズのものであった。

国会図書館の目録によれば、邦語文学科シリーズの講義録は二回しか刊行されていない。これに対して、文学科シリーズの講義録は明治三十六年まで刊行されていた。ここでは、藤田の著作と同じシリーズの別の講義録を参考にして、「邦語文学科第一回二年級講義録」及び「文学科第二回三年級講義録」の刊行時期を推測する。

同じ邦語文学科講義録では、池谷一孝の『日本文学史』『邦語文学科第一回一年級講義録』が明治三十年の刊行と明記されていることから、藤田の「邦語文学科第一回二年級講義録」も明治三十年に刊行されたと考えられる。

また、同じ文学科講義録では、後藤寅之助の『文学綱要』は、「文学科第一回二年級講義録」として明治二十九年に、「文学科第二回二年級講義録」が明治三十年に、それぞれ刊行されたのである。したがって、藤田の「文学科第二回三年級講

義録」も明治三十年に刊行されたと考えられる。

三

前述のとおり、藤田の中国文学史に関する著作は、東京専門学校講義録の『支那文学史 完』以外に、もう一つあり、それは明治三十年五月に東華堂から刊行された『支那文學史稿 先秦文學 全』（以下『先秦文学』と省略）である。錢鷗の研究によれば、この二冊はかなり関連性が強い⁽²⁰⁾。

本書（『先秦文学』 筆者注）は上世より秦までの文学を扱い、実は一部分の論説と例について少量の拡張と書き加えを除けば、上記の東京専門学校講義録の『支那文学史』の第1期「古代文学」とほぼ同一のものである。もちろん体系・内容、観点も上記書とあまり変わっていないのである。

即ち、『先秦文学』は東京専門学校講義録に基いて書かれたものである。

また、一九〇〇年に刊行された『支那文学大綱』シリーズの第十一巻の『司馬相如』と第十二巻の『司馬遷』⁽²¹⁾に対して、竹村則行は次のように評価している。

両著（『司馬相如』と『司馬遷』 筆者注）はいずれも漢武帝期を代表する二大文人について、時代背景、伝記、同時代の人物、文人の文章について評論したものであるが、注目すべきは、この両著ともに、その直前に発刊された藤田豊八講義録『支那文学史』中の叙述をそのまま踏襲していることである。

即ち、両著も東京専門学校講義録に基いて書かれたものである。

藤田の中国文学史研究の特徴を検討するため、東京専門学校講義録二種・『先秦文学』・『司馬相如』・『司馬遷』という四つの著作を検討してみよう。

これまで、藤田の中国文学史研究に関する重要な先行研究がいくつか存在する。最初の研究は『東洋哲学』第四編第六巻に載せられているもので、これは藤田の『先秦文学』と古城貞吉の『支那文学史』を、(一) 體裁、(二) 内容、(三) 文章の三方面から比較したものである。⁽²²⁾

また、『中国の文学史観』では、藤田の文学史研究法について、次のように語っている。⁽²³⁾

藤田の文学史では「思想内容」、「芸術形式」という二本立ての方法を取って記述されているが、これは後に多くの文学史によって踏襲されていくものである。思想の特質から文学を捉え、批評する視点は、今も時に文学批評の有効な手段として使われて珍しいものではない。しかし、当時においては、それはやはり人々の耳目に新鮮な驚きを与え、旧来の中国文学の解釈方法と異なるが多かった。

藤田の「思想内容」と「芸術形式」という二本立ての創造的な批評法を高く評価しているのである。

そして、江上波夫の『東洋学の系譜』では、藤田の中国文学史研究の業績を次のように評価している。⁽²⁴⁾

それらは中国古代の文学と史学の両面に通曉した学者にして、しかも人間性や文化の諸相にも透徹した、鋭敏な理解力ある文人にはじめて能く達成し得るような高度の作品として当時刮目されたという。

ここでは、それらの研究成果を利用して、同時期に刊行されたほかの中国文学史を対照して、新たな視点から彼の研究特徴を検討しようとする。

第一には、世界規模で中国文学を評価することである。中国文学史を研究するのは、その文学的な価値があることにちがいないのであるが、同じ研究対象に対しても、研究者たちが与える評価は異なっている。例えば、古城貞吉の『支那文学史』では、中国文学に対して次のように論述している。

支那は東洋の古國なり、其の國を建てしことは遠く三千年前に在り、隨て其の制度文物も亦夙に開けて、一時其の

盛を極めたり、然れとも興廢常なく、變故轉瞬、盛なるもの以て衰へ、蠻野なるもの以て起り、歷朝の沿革、毎に環の端なき如く、一起一仆、相沿ふて故轍を再做し、而して其の文化の夙開せしもの、亦竟に中絶止息して發達の運に向はず、誰か思はず、今日彼の營々として蕃殖蔓延せる夥多の人口、少くとも血肉を此の古國の前聖なる堯舜治下の後裔子孫に承け、其の開化は嘗て自國の制度の下に發達し、其の政治は嘗て模範を他の外國に採らず、其の文學は自國の學者の講究に成り、其の言語文字は其の國人の考案製出に係るものならむとは。

即ち、古城は、中国の政治や社会制度などは完全に独立して發展してきたのであり、中国文學もまた独立した個性をもつと強調したのである。これこそが、中国文學の価値だと主張しているのである。

これに対して、藤田は中国文學の価値を次のように評価している。⁽²⁵⁾

文學に至りては上下幾千載を通し、古今幾十朝に亘り、脈々として絶ゆることなく、幾百萬の載籍は支那國民の思想と感情とを藏して後昆に傳へたり。その古をいへば、世界の文學の最も古きものなるべく、その壽命をいへば世界の文學の最も長きものなるべく、その風化をいへば世界の文學の最も廣きものなるべく、その富饒をいへば世界の文學の最も富饒なるものなるべし。その眞値は世界の或る文學に比して遜色あるべしと雖も、余は支那文學の優に世界の文學史上に於てその位置を保ちて餘あるものなるを信ず。

文學史研究の起源は比較文學研究の發達にある。文學史研究は、ある國の文學の価値があるかどうか、と判断することであり、他國の文學と比較することによって評価が始まるからである。藤田は西洋の文學概念と西洋の比較文學研究の精神を取り入れて中国文學史を編纂した。彼は西洋の文化・學術をも視野に入れて、世界規模で中国文學の価値を求めようとしたのである。

第二には、文學史の時代区分である。古城の場合は、全て歴史上の時代区分に沿って、文學史を述べている（拙作「古

城貞吉と『支那文学史』について⁽²⁶⁾に参照)。児島の場合は、『支那大文学史古代編』では九期に分けて述べ、『支那文学史網』では四期に区分する。『支那大文学史古代編』は、尚書・詩経・諸子を中国文学のトップレベルのものとして評価し、それらを起点として後代の各時代の文学発展を論述した。その価値観により、「破壊時代・彌縫時代・浮華時代・中興時代・模倣時代・集成時代」が決められた。『支那文学史網』は、万物がたえず発展するという観念が見られる。キーワードは「革命」である。児島は、文学の発展は文学の革命と考えた上で、歴代政事、各時代の風潮を観察し、核心となる文学者を選んでその文学的影響を考慮し時代を分けた(拙作「児島献吉郎の支那文学史研究について」⁽²⁷⁾に参照)。即ち、『支那文学史網』を書くときには、彼の中国文学に対する認識は従来の漢学的な考え方から離れて、西洋の「進化論」に近づいていたと考えられる。

藤田は、中国文学史を三時期に分けた。つまり、第一期の古代文学(上古より秦まで)は中国文学の起源の時期である。第二期の中世文学(秦漢から唐宋まで)は中国文学の最盛期である。第三期の近世文学(元から清まで)は俗文学が盛に起る時期である。単に中国文学史を三時期に区分することから見れば、藤田の考え方は普通であるが、各時期の特徴の指摘に、藤田の特徴が現われた。第一期については、藤田は次のように述べている。⁽²⁸⁾

文學上に於ても堯舜三代の北方文學と共に荆楚南方の文學起り、また西方秦の文學起り、文學に頗る異分子を有すると共に所謂支那文學なる國民文學の基礎と置きたり、後世推重せる堯舜三代の文學は只だ支那北方の文學にすぎざるなり。

即ち、起源時期の中国文学が、地方によって文學の質を異にすることを強調している。実際、『先秦文学』の目録を見れば、そこには従来の儒家尊重の態度が見られない。北方文学を代表する孔子・孟子・荀子についての記述は三十頁に対して、南方文学の代表である老子・莊子に関する論述は六十五頁、西方文学の管子・韓非子に関する議論は三十五頁である。

そして、第二期については、藤田は次のように指摘している。⁽²⁹⁾

詩に於ても文に於ても頗る發達してその種類に富むこと古代文學の比にあらず。曠世の大文豪の輩出前を集大成し後を睥睨す。而して佛教の東遷は此期の初にして古代の思想に一大變化を與へ往々理想家の出つるを見るに至りき。(中略)但し前三者と宋文學との間には思想上一大巨溝あるを忘るべからず。

即ち、文學史を述べながら、思想上の著しい變化を強調している。

また、第三期について、藤田は「宋末より元に至りて俗文學盛に起る。是れ此期の第二期に殆ど缺乏せるものを補ひたるものなり。思想上に於ては宋の遺を承け特に見るべきの變化なしと雖も支那文學の全觀より云へば硬文學はやゝ衰運に向ひたるが如し。」と述べている。⁽³⁰⁾即ち、俗文學の發達を語りながら、思想上の繼承性を指摘しているのである。

思想史の變化を注目するのは、藤田が書いた中国文學史の構造上の特徴ともいえる。これは、当時彼が中国哲學史を専攻していたことかなりのつながりがあるのではないかと考えている。

三には、偽書に対する関心が強いことである。『先秦文學』には、「書の眞なる部分、偽なる部分」、「文子、關尹子、皆な偽なり。」及び「列子また偽書」の節が見られる。その三節では、皆偽書の疑問が持ち上げて、歴代の考証経緯を詳しく紹介した上で、偽書の結論をくだした。それに対して、古城貞吉の『支那文學史』や児島献吉郎の『支那大文學史古代編』及び『支那文學史綱』では、同じような考察は見られない。

ここでは、まず『文子』、『關尹子』についての記述を見てみよう。古城は次のように述べている。⁽³¹⁾

老子の弟子に、文子、亢倉子の屬あり、並に書を著はして其道を言ふ、文子の書、道原篇以下十二篇、殆ど老子道徳經の釋傳なり、然れとも亦依托に出るものに似たり、亢倉子の今行本は、唐の王士元の偽撰に係るものなり、又關尹子の一書あり、稱して尹喜の撰する所と云ふ、其文峻潔にして頗る愛讀に堪えたりと雖も、隋唐以来其の本書の佚

すること既に久しければ、蓋亦依托に出るものなるへし、或は云ふ今行本は、唐五代間の方士、文章を解する者の為くる所ならむと、其説最も従ふべきに似たり。

即ち、文子や關尹子を老子の弟子として紹介し、『文子』と『關尹子』に対して偽書という断定を避けて、かわりに「亦依托に出るものに似たり」、「依托に出るものなるへし」と述べている。

兎島は、文子のことにはまったく触れていず、關尹子についても「老子の流に關尹子、鶡冠子、列子あり、皆虚無の道を傳ふるものなり。」というだけである。

古城や兎島は、文学史上では「文子」、「關尹子」をあまり評価していないので、著作の真偽まで考察する必要はないと判断したのである。

これらに対して、藤田は別の考え方を示している。ここでは、『文子』のを見てみよう。『先秦文学』では、

老子一たび無名の名を立て、無為の為を唱ふるや、同時之に歸するもの文子あり、關尹子あり。今共にその書存ず。漢志道家文子九篇あり、本註にいふ、老子の弟子なり、孔子と時を並ぶ。周平王問ふと稱す。依托せしものに似たりと。唐志いふ魏の李暹註して十二篇となすと。今の篇次と同じ。姓は辛、名は計然、字は文子といひ、茫蠡の師たりと傳ふ。信ずるに足るなし。その書の性質は柳子厚之を評し盡せり。以為らく、その書を考ふるに蓋し駁書なり。凡そ孟子數家皆な剽竊せらる、文詞 牙相抵して合はず。人之を損益せしか、或は聚斂してその書をなせしかと、漢志既に以て依托となす。その偽知るべし。

と述べている。⁽³²⁾ 即ち、『文子』について、まず文子その人は実際に存在したかどうか、ということから考証し、この書物に對する歴代の評価を調べ、その本は偽書だと判断した。

なぜ藤田は真劍に著作の真偽を考察したか。これは当時の学風を考えてみなければならぬ。藤田が東京帝国大学漢学

科に在学した時には、島田重禮、三島毅、竹添進一郎などが在任中であった。特に、島田重禮について、『東京大学百年史』では、次のように述べている。⁽³³⁾

本邦（日本＝筆者注）の経学研究に清代考証学を本格的に導入した最初の学者である。明治三十一年に現職で死没するまで東大教授を勤め、その学風はよく服部宇之吉・狩野直喜によって、明治・大正期の東京・京都の両帝国大学における中国学の講座に継承された。島田は、したがって本邦のアカデミズムにおける実証的な中国古典学研究の開祖に位置する。

即ち、島田重禮の考証学により、漢学科の学風が変わったのである。⁽³⁴⁾

学科内には明治三十年代に「支哲」・「支史」・文学とかわれて、ほぼ経子・史・文の専攻コースができるなかで、むしろ史学の重鎮・重野・星野と新進の市村を擁して、程度の差こそあれ辨偽的な文献批判の盛ん潮流のなかで、中国哲学・文学の史的研究が進められるようになった。

藤田がその学風の影響を受けたことはまちがいない。したがって、藤田は、文学史は一種の歴史であればこそ、歴史上の真偽を考察しなければならぬという考え方を強く持っていたのであろう。この態度によって、文学思想や芸術形式の面から述べる必要が少ない『文子』や『關尹子』にまで筆墨を費やして、偽書の考証を詳しく行ったのである。或いは、彼の文学史研究は文学的な分析より考証のほうに重点を置いていたと思われる。例えば、『列子』の場合、まず本の作者で伝われる列子のことを四頁を費して考察し、「列子の書は決して戦国末以前のものとなすを得ず。西方有聖人の章の如き漢末魏晋の際に出でたる殆ど疑なきが如し」と結論する。そして、『列子』の文学的な特徴を次のように述べている。⁽³⁵⁾

その文字温厚なるあり、瑰麗なるあり、明媚なるあり、淺俗なるあり。未だ一概に論じ去る可ずと雖も大抵柳子厚の『其文辭莊子に類し、質厚にして為作少し』といへる朱子の『平淡疎曠』といへると互に相補して列子の全觀を盡すに

足らん。列子の文老子の奥妙なく、また莊子の神變なし、たゞ質厚にして為作少なく平淡踈曠なる愛すべきのみ。

『列子』を文学作品として評価すべき部分はわずか数行で終わっているのである。これによって、藤田の歴史に対する強い関心を見ることが出来る。

三には、小説についての論述が見られる。これは『支那文学史完』の最後にある「其四、小説の萌芽」という部分である。この論述について、錢鷗は次のように評価している。⁽³⁷⁾

彼（藤田＝筆者注）は古来の諸子十家の一つとしての小説家による「小説」と後世のいわゆる「小説」との区別をはっきりさせながら、一方では、神仙方術者の空想ものや莊列屈原の書から後世のいわゆる小説の濫觴を見出し、また神仙小説や随筆などの具体的描写の文学性を論じて後世小説との関わりを探っていた。この点における着目も先駆的といえるだろう。

即ち、藤田は中国の先秦時期の小説と「後世小説」をはっきり区別し、文学発展の視点から「後世小説」の起源を追及したのである。錢鷗は、これらの考察が「先駆的といえる」と高い評価を与えた。

私は、小説家による「小説」と「後世小説」との区別を明確にしえたのは彼の考証的な学風によるものであると考えている。⁽³⁸⁾

彼の考証は、まず中国の書誌で「小説」への言及がいつ頃かの検討から始まる。⁽³⁸⁾

支那に於て小説の目は始めて劉向及びその子歆の手に成りし七畧に見ゆ。七畧は當時に存せし群書を總へて輯畧、六藝畧、諸子畧、詩賦略、兵書略、術略、方技略となし、ものなり。その諸子畧中に諸子を十家に分ち小説家をその一に列す。七畧今傳はらずと雖も漢書の藝文志はその要を摘みしものなり。然れともこゝに所謂小説とは今の所謂小説と相同じきものにはあらず。

つまり、漢代の書物の中で、「小説」という名称が見られると指摘した。

続いて、漢代の書物にある「小説」や「小説」に似る「随筆」などの成立年代を考察し、漢書にある小説は周代にまで遡るものを記載しているがと記載しているが、藤田は、

此等は皆な古聖往賢の言行に托し所謂街に談じ巷に語りしを綴録せしものなり。その書多くは戦國秦漢の際に世に出でしものなるべし。一種想像の産物には相違なかるべきも固より今の所謂小説の如きものにあらざるは明なり。

⁽³⁹⁾と、これらの作品は周代の作でなく、戦国或いは秦代、漢代のものであることを指摘した。

また、藤田は空想性が後世の小説の一番大きな特徴であると考えていたので、小説の起源を追究する時に、豊かな想像力に満ちている荘子や屈原の作品を高く評価したのである。

第四には、文学史における重要人物に対する認識である。従来の漢学では、孔子は最も重要な人物として尊重されていたので、早期の中国文学史には、孔子や儒学のことを多くの章節を費やして論じている。これに対して、藤田の文学史では、孔子より孟子、荀子のほうを重点的に描いた。『先秦文学』の目録を見ると、孔子に関する記述は、(一)孔子・(二)その遺言、及びその徒の遺著という二つの節がある。孟子に関する記述は、(三)孟子、その小傳・(四)その述作・(五)その思想の傾向・(六)その文學的技能、という四つの節がある。そして、荀子に関する記述は、(七)荀子、その師承及び時勢・(八)その小傳・(九)その思想の傾向・(十)その文致、という四つの節がある。ここから、彼が中国文学と漢学と区別しようと努力した様子が見えるのであるが、一方、実際に両者は完全に区別されていなかったこともわかるのである。

おわりに

藤田の中国文学史研究の業績は、単行本でまとめられたものだけでなく、雑誌に載せられた論文も多数ある。明治二十七年から三十四年の間に、十数本の論文が発表された。それらを年代順に整理すると、次のようである。

「荆楚文學の妙趣」 『精美』第三七號 明治二十七年十月

「孔子以後の儒學派」 『東洋哲学』第一編第八・一一・一二號 明治二十七年十月・二十八年一・二月

「荀子」 『哲学雜誌』第九三・九四・九五・九六號 明治二十七年十二月・十二月、二十八年一・二月

「墨子及墨學派」 『六合雜誌』第一六六・一六八・一七〇・一七一・一七二號 明治二十七年・二十八年

十八年

「支那文學に於ける道教の影響」 『六合雜誌』第一七四號 明治二十八年

「魏晉文學と陶淵明と」 『帝國文學』第一卷第八號 明治二十八年八月

「南方文學と莊叟」 『太陽』第二卷第一二・一三・一六號 明治二十九年六・六・八月

「詞人屈原」 『日本人』第二四・二六・三三號 明治二十九年八・九・十二月

「支那文學の特質」 『江湖文學』第一號 明治二十九年十月

「詞人司馬相如」 『江湖文學』第四號 明治三十年二月

「漢代に於ける詩人の流」 『江湖文學』第六號 明治三十年四月

「先秦文學と孟・莊・韓」 『支那文學大綱』第一卷 明治三十年八月

「魏晋文學の源流」

『帝国文學』第六卷第一一號

明治三十三年十一月

「支那小説の起原を論ず」

『帝国文學』第七卷第五號

明治三十四年五月

そのうち、明治三十年まで発表されたものは、東京専門学校講義録・『先秦文学』・『司馬相如』・『司馬遷』などの章節になったのが多い。即ち、第三節で取り上げたものである。これ以外、魏晋時代の文学について『帝国文學』（第一卷第八號）に載せられた「魏晋文學と陶淵明と」がある。しかしながら、この論文は未完成のまま、発表されたのは「第一鑿魏晋以前の支那南方思潮」と「第二鑿佛と道との相配」との二つの節だけである。この論文は文学や陶淵明にまで触れていないが、彼がどのように魏晋文学を語ろうとしていたかは、次の文章によって推測できる。

文學の形のみの變遷を叙するを以て文學史と稱するの陋を知ると共に文學の想のみの變遷を論するを以て文學史と稱するの隘を知る。されば余は時と外圍と人とを觀察し文學なる現象に對してその想と形との變遷推移を叙し以て支那文學の幽光を發揮するに務むべし。

と述べているように、文學を述べる時に、歴史や環境や思想などの諸要素も考えなければならぬという研究態度が彼の特色である。

しかしながら、何らかの理由があって、藤田は中国文学史を「四冊を以て完了す。上世より秦に至るまでを一冊とし、兩漢魏晋南北朝間を一冊とし、唐五代間と元明清とを各々一冊とし、取次刊行せんとす。」⁽⁴¹⁾という計画を途中で中止した。のち藤田は東洋学界に活躍の場を移したのである。

明治三十年代ごろ、藤田のように従来の漢学研究法から離れて、近代的な研究法で中国文学を研究していた若者が少なくなかった。その中で、藤田の中国文学史研究は最も著しい成果を上げたものと言えるであろう。

- 〔注〕
- (1) 江上波夫編著『東洋学の系譜』(第2集) 十四頁 (大修館 一九九四年九月)
 - (2) 小柳司気太著「藤田豊八博士略傳」一〇七頁参照(故藤田豊八遺著池内宏編『東西交渉史の研究』(南海篇) 国書院 昭和七年三月)
 - (3) (注1) 十四〇三二頁参照
 - (4) 錢鷗著「藤田豊八」三十七〇四十一頁参照(川合康三編『中国の文学史観』所収)「資料篇」(創文社二〇〇二年五月)
 - (5) (注2)の一〇七頁及び注1の十四〇三二頁参照
 - (6) (注1)の十四〇三二頁参照
 - (7) 蔭山雅博著「江蘇教育改革と藤田豊八」二十四〇四十三頁参照(『国立教育研究所紀要』115集国立教育研究所一九八六年)
 - (8) 渡邊與五郎監修李素楨著『日中文化比較研究』二〇八〇二〇一頁(文化書房博文社一九九九年七月)
 - (9) 「先学を語る(1)―藤田豊八博士―」の著作目録参照(東方学会編『東方学回想(I)』刀水書房平成十二年一月)
 - (10) (注4) 四十頁
 - (11) 同(注10)
 - (12) 和田英信著「明治期刊行の中国文学史」(川合康三編『中国の文学史観』所収) 一六六頁(創文社二〇〇二年五月)
 - (13) 『早稲田大学百年史第一卷』八四四八頁(早稲田大学大学史編集所 昭和五十三年三月)
 - (14) (注13) 八五五三頁
 - (15) (注13) 八五五二頁
 - (16) 『早稲田大学文学部百年史』五七八頁(早稲田大学第一、第二文学部一九九二年九月)
 - (17) 資料50「各科課目一覧および担任講師明治三十一年十月」(『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学大学史編集所昭和五十三年三月)
 - (18) 資料43「明治二十九年度年報『明治二十九年度東京専門学校年報明治二十九年十二月調』」一六六頁(『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学大学史編集所昭和五十三年三月)
 - (19) 小柳司気太著「藤田豊八博士略傳」一三二頁(『東方学会編『東方学回想(I)』刀水書房平成十二年一月)

- (20) (注4)四十一頁
- (21) 竹村則行著『支那文学大綱』と田岡嶺雲(川合康三編『中国の文学史観』所収)一九〇頁(創文社二〇〇二年五月)
- (22) 秋水著「新刊批評先秦文學と支那文學史」三一三〜三二四頁参照(『東洋哲學』第四編第六卷明治)
- (23) (注4)四十頁
- (24) (注1)十七頁
- (25) 藤田豊八著『支那文学史稿先秦文学全』一〜二頁(東華堂明治三十年五月)
- (26) 大学院紀要『二松』第十七集に掲載(二松学舎大学院文学研究科 二〇〇三年)
- (27) 『人文論叢』第七十一輯に掲載(二松学舎大学人文学会 二〇〇三年十月)
- (28) (注25)十一頁
- (29) (注25)十一〜十二頁
- (30) (注25)十二頁
- (31) 古城貞吉著『支那文学史全』九三〜九四頁(富山房明治三十五年十二月)
- (32) (注25)百十三頁
- (33) 『東京大学百年史部局史一』五〇八頁(東京大学百年史編集委員会 昭和六十一年三月)
- (34) (注31)五〇九頁
- (35) (注25)百十九頁
- (36) 同(注33)
- (37) (注4)四十頁
- (38) 藤田豊八著『支那文学史』「東京専門学校文学科第2回3年級講義録」四〇五〜四〇六頁
- (39) (注36)四〇七頁
- (40) (注25)二〜三頁
- (41) (注25)凡例二頁

参考文献…

- 伊藤整著『日本文壇史』（4）（講談社一九九九年六月）
『東京専門学校のこと…揺籃期の早稲田大学』（早稲田大学大学史編集所一九九三年三月）